

大学院ニュースレター

久留米大学大学院医学研究科

第114号／2025年9月1日発行

編集／ 医学研究科長

『倫理申請はなぜ必要なのか？』

法医学講座 教授 神田 芳郎

本学の医学研究に係る倫理委員会（名称は大学によって異なるが、久留米大学では医に関する倫理委員会）の委員になってから四半世紀に近い年月が過ぎた。

人を対象とした医学研究の実施にあたっては、必ず事前に倫理委員会による審査を受け承認を得ておかなければならない。すぐにでも研究を始めたい研究者にとって、申請書の作成には忍耐が必要で研究全体の半分からの労力を使い果たしてしまうのでは、という心持になる。さらに審査は月に1度しかなく承認されるまでに時間を要するため、まるで研究の足枷のように感じられるだろう。長年携わった者として、ここでは倫理申請がなぜ必要なのかについて触れることで、大学院に所属し研究に従事しておられる皆さんに僅かなりとも理解していただき、次の委員会にバトンを渡したいと思う。

人を対象とした調査や実験をする立場の研究者は、研究を行うことによりデータや知見を得ることできる。最近ではデータを外部に公表しようと思っても、例えば科学雑誌の投稿規定には、承認を得た倫理審査委員会の名称および承認番号を開示するよう明記されている。いくら正しいデータであったとしても、その取得方法に問題があれば、公表できる結果として扱えないからである。一方、研究の参加者（研究対象者）は社会や研究の発展のために医学研究に利用されるリスクを負う。したがって、研究者が、研究対象者に必要以上の精神的、あるいは身体的な負担や不利益を与えないように

十分配慮しなければならない。しかしながら、その研究に従事する研究者だけでそれらの問題を考えても限界があるので、研究計画の適否を第三者が判断するのが「研究倫理審査」である。さらに、研究倫理審査は、これらが行われる研究計画が妥当であるかとその研究が適切に実施されたか否かを判断するものである。したがって、既にデータを採取してしまった研究に関しては遑って承認することはできないことに注意を要する。

「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」では倫理審査委員会は「医学・医療の専門家等自然科学の有識者、法律学の専門家等人文・社会科学の有識者及び一般の立場を代表する者で構成され、かつ、外部委員を含まなければならない。また、男女両性で構成されなければならない。」と定められている。また当然、当該研究に係っている研究者は審査に加わることができない。このような委員で構成されている委員会が、審査では何をチェックするのかであるが、大きく分けて、科学的妥当性（研究の意義や予想される結果が科学的に妥当なものであるか）、倫理的妥当性（研究対象者の人権・安全・福祉に配慮したものであるか）、説明責任（研究対象者に対して調査・実験の内容について十分に説明できているか）、同意取得の有無（研究対象者に対して研究内容への理解を得た上で、自由意思による参加の同意ができているか）、個人情報保護（研究対象者のプライバシーに関わる記録等が十分に保護されているか）の5つ

である。要するに、その研究が「科学的・社会的に実施する意義があり、安全で公正な研究であるかどうか」を確認する。このように、研究に関らない第三者が研究手続きの妥当性や研究対象者の安全性やプライバシーの保護を確認することは研究対象者のみならず研究者自身を守ることにもつながっ

ているのである。

提出された申請書は、出来るだけ研究が遅延しないよう事務担当者が丁寧に確認し、申請者とのやり取りを繰り返し倫理審査に臨むことになる。この担当者の絶え間ないご尽力に心からの敬意を表し、筆を擱きたい。

『Only one を目指して』

呼吸器・神経・膠原病内科講座 教授 井田 弘明

大学院の皆さんは、大学というアカデミアににいるという意味を考えたことがあるだろうか。大学で研究を行い、医学の発展に貢献できる可能性があることは、幸せだと思う。本稿では、私の研究の歴史を思い出しながら、私が感じてきた研究について述べてみたい。

私は、医学部卒業後 3 年目に大学院に入った。臨床の教室での大学院生であったため、1 年目は 3 人、2 年目は 2 人、3 年目は 1 人のベッド持ち(入院患者の主治医)をしながら研究を行った。4 年目でやっと受け持ち患者なしで研究のみの生活となった。当時は、モノクローナル抗体とサイトカインの全盛期であり、血管内皮細胞を臍帯から、滑膜細胞を人工関節置換術で切除された関節組織から分離して研究に使っていた。私も分離を手伝った。細胞分離後は培養して増やし、サイトカイン刺激して細胞表面分子の変化をフローサイトメーターで解析した。細胞を変え、表面分子を変え、教室では論文が面白いように出来ていた。学会では、不思議なことに同じような研究発表が並んだ。どうしてこの研究をあなたがやっているのか、オリジナリティーはあるのか、と思った。そのような時期に大学院へ入学した。私のオーペンは、米国 NIH から帰国されたばかりの先生で、厳しく指導していただいた。当時では珍しいペプタイドケミストリーを使った免疫の研究だった。オリジナリティーのある研究であったと思う。当時、

HTLV-I 感染の研究も教室で行われ、私は当時解明されていなかった HTLV-I レセプターが接着分子ではないかと仮説を立て、HTLV-I 感染細胞が標的細胞を合胞体形成させる実験系で研究した。その系に接着分子のモノクローナル抗体を添加、合胞体形成が抑制されるか観察した。結果的に上手くいかなかったが、毎日、細胞培養を行っているインキュベータを開ける前は、心臓の高鳴りを感じた。研究していることの幸せを感じた。

大学院卒業後にボストンのハーバード大学のダナ・ファーマー癌研究所に約 3 年半留学した。当時はあまり注目されていなかった NK 細胞の研究を行った。NK 細胞を活性化させるとアポトーシスを起こすことがわかった。帰国後は研究生として、半日は外病院、午後から大学へ戻って、研修医のオーペンをしながら研究を行った。その中で活性化 NK 細胞がアポトーシスを起こすメカニズムを突き止めた。活性化した NK 細胞では、自身が持つグランザイム B が漏出して自爆していたのである。同じような研究を行っている研究者はいなかった。

当時大学では臨床も行っていたが、私の研究者人生を大きく変えるような患者さんに遭遇した。発熱を繰り返す全身性エリテマトーデスの患者さんが、遺伝子変異による自己炎症性疾患(TRAPS)を合併していた。自己炎症性疾患は、遺伝子変異でヒトに臨床症状が出現する病気であり、大変興味を

持った。以降、どっぷりとこの世界に浸っている。2007年ボストンで開催された米国リウマチ学会で TRAPS 症例を発表した。当時の日本では、自己炎症性疾患は馴染みが薄く、認知されていなかった。私は最後のスライドで、「In Japan, TRAPS patients are rare, and autoinflammatory syndrome has been just started to recognize by physician. Figuratively speaking about baseball, we are minor league players. In future, our Japanese researchers find something related to autoinflammation, we will become major league players like Daisuke and Okajima. 」と話した。当時のボストンレッドソックスには、松坂投手と岡島投手がいて、その年に World Champion になっていたため受けを狙ったわけである。その後、自己炎症性疾患で研究を続け、2010年に中條・西村症候群がブ

ロテアソームの遺伝子変異で生じることを突き止めた。これも周期熱の患者さんの相談を受け、そこから発展した研究であった。研究の宝はどこに眠っているかわからない。現在自己炎症性疾患は、多くの先生方の力で日本でも認知されてきた。嬉しい限りである。

大リーグでは現在、大谷翔平選手が大活躍している。日本人としても誇らしい限りである。彼が行っているのは、打者と投手の二刀流であり、他の誰も行うことが出来ない「Only one」の世界である。研究で言えば、正にオリジナリティーに富むことをやっているのけている。大学院の皆さん、学位を取することは重要であるが、日本でこれだけ研究に没頭できる時期はない。大事に時間を使って欲しい。そして、「Only one」を目指して欲しい。Good Luck !!!

《事務通信》

学位申請に関する情報について

修士課程2学年、博士課程4学年の学位論文提出を予定されている方は、学位論文の申請・審査手続通知についてご確認ください。学位に関して不明な点は、医学研究科 HP 「学位申請情報」 → 「学位申請に関する Q&A」 をご覧ください。

<https://www.kurume-u.ac.jp/site/gmed/gakui-index.html>

学位論文のお問い合わせ先

医学部事務部庶務課学位担当：立石・内山

内線：3018／ダイヤルイン：0942-31-7527



第11回研究発表会の開催について

既にお知らせしておりますとおり、研究発表会を12月8日（月）・9日（火）に開催いたします。

研究発表はご自由に聴講していただけますので、是非ご参加ください。（1年生は原則聴講してください。）

◆修士・博士課程の皆様へ◆

令和7年度 大学院セミナーシリーズ（特別講義）カリキュラムのお知らせ

担当講座	講義日時	会場	講演者	講義テーマ
医療検査学科	9月12日 (金) 18:00～19:30	基礎3号館 1階 セミナー室	柳沢 正史 先生 (筑波大学 国際統合睡眠医 科学研究機構 機構長)	睡眠の謎に挑む～基 礎研究から睡眠ウェ ルネスまで～
疾患モデル研究 センター	9月24日 (水) 17:00～18:30	基礎3号館 1階 セミナー室	岡野 栄之 先生 (慶應義塾大学医学部生理 学教室 教授)	中枢神経系の再生医 療と疾患研究
外科学講座	10月21日 (火) 17:00～18:30	基礎3号館 1階 セミナー室	紅林 淳一 先生 (川崎医療福祉大学 医療 福祉マネジメント学部 医 療秘書学科 特任教授)	乳癌の生物学的特徴 とトランスレーショ ナルリサーチ
医学教育研究 センター	11月6日 (木) 18:00～19:30	基礎3号館 1階 セミナー室	及川 沙耶佳 先生 (秋田大学大学院医学系研 究科 医学専攻 社会環境医 学系 先進デジタル医学・医 療教育学講座 特任教授)	医学教育研究におけ る研究手法や科学哲 学について
公衆衛生学講座	11月13日 (木) 16:30～18:00	教育1階館 5階 1501教室	Ichiro Kawachi (John L. Loeb & Frances Lehman Loeb Professor of Social Epidemiology, Department of Social and Behavioral Sciences, Harvard School of Public Health)	Society and Health (仮題)
皮膚科学講座	11月20日 (木) 18:00～19:30	基礎3号館 1階 セミナー室	玉井 克人 先生 (大阪大学大学院医学系研 究科 招聘教授)	未定
解剖学講座（顕 微解剖・生体形 成部門）	11月27日 (木) 17:30～19:00	基礎3号館 1階 セミナー室	樋田 一徳 先生 (川崎医科大学 解剖学講 座 教授)	未定
	1月9日 (金) 17:30～19:00	基礎3号館 1階 セミナー室	吉田 松生 先生 (自然科学研究機構 基礎生 物学研究所 発生生物学領域 生殖細胞研究部門 教授)	未定
感染医学講座 (真核微生物学 部門)	未定	基礎3号館 1階 セミナー室	真柳 浩太 先生 (九州大学 薬学研究院 臨 床薬学部門 講師)	未定

日時・場所等に変更がある場合には、電子シラバス（Hondana）でお知らせいたします。

また、当該科目履修者は5回以上のセミナー出席及びレポートの提出をお願いいたします。

レポートについては、各セミナー終了後1週間以内に、医学部事務部教務課までご提出ください。

履修者以外の方も自由聴講が可能ですので、是非ご参加ください。

令和8年度 医学研究科後期入学試験 学生募集！！

下記のとおり学生の募集を行いますので、お知らせいたします。

【試験日程】

修士課程・博士課程ともに同一

* 後期試験

出願受付期間：令和7年12月15日（月）～ 令和7年12月19日（金）必着

試験期日：令和8年1月13日（火）

合格発表：令和8年2月13日（金）午前10時

※他に出願資格審査申請受付期間を設定していますのでご注意ください。

出願資格審査受付期間

令和7年11月10日（月）～ 令和7年11月14日（金）必着

【試験内容】

* 修士課程

- ◆ 医科学専攻 基礎医学群・社会医学群
- ◆ 総合生命科学・バイオ統計学専攻 総合生命科学群
- ◆ 看護学専攻 修士論文コース・専門職養成コース
英語・小論文・面接

- ◆ 総合生命科学・バイオ統計学専攻 バイオ統計学群
英語・面接



* 博士課程

英語・面接

出願資格審査、出願方法等詳細につきましては、本学大学院医学研究科ホームページの「入試情報」をご確認ください。科目等履修生も同時募集中です。
身近な方で、医学研究科に興味・関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ご紹介の程どうぞよろしくお願いします。





編集後記

本学大学院教育を多くの方々に周知・ご理解いただき、今後も広報活動に力を入れ、本学大学院教育の魅力を発信して参りたいと思います。12月には11回目となる研究発表会が予定されています。学术交流の機会になりますので、是非ご参加いただきますようお願いします。